

〔 論 文 〕

移民, そして集団就職 ～人材を移出し続けた鹿児島県～

高 嶺 欽 一

目 次

- はじめに
- I. 日本人と移民
- II. 鹿児島県のブラジル移民
- III. 「有数の移民県」の背景
- IV. 人材移出県であり続ける鹿児島県
- おわりに

はじめに

ブラジルに行く機会があった。20年余り前の1978年のことである。ちょうどサッカーの世界・カップ決勝戦ブラジル対アルゼンチンの試合が隣のアルゼンチン・ブエノスアイレスで行われていて、街は文字通りに熱狂の坩堝の中にあった。そのバカ騒ぎとっていい様に目を見張ったものだ。もうひとつ、在ブラジル鹿児島県人会のこれも熱狂的な歓迎を受けて、移民と呼ばれる人々の心情に深い感動を受けた。当時、日系人は80万人といい、うち鹿児島にゆかりのある人々は五世まで数えて3万人いると聞いた。県人会の一世、二世の人々の話を聞いて歩くうちに、鹿児島は移民を多数送り出している県であることを知り、その構造的要因に関心を寄せることになった。その構造は高度経済成長期の大量の労働力移出にもつながっていく。この小論では、人材移出県・鹿児島の姿をなぞる。

I. 日本人と移民

日本人の南北アメリカ大陸への渡航は明治維新前後に始まる。新島襄（同志社創立者）は1864年（元治元年）に函館からアメリカを目指した。幕府が鎖国を解く前で、密航だった。米船の船倉に隠れて1年2ヶ月かかってボストンに着いた。1868年（明治元年）には、薩摩藩がイギリスに派遣した留学生のうち長沢鼎（本名・磯永彦輔）森金之丞（のちの有礼）鮫島尚信の3人がイギリスから渡米した。森、鮫島は見聞をすませて日本に帰ったが、長沢は残ってカリフォルニアに永住して農園を建設し、ワインの醸造も手がけて大きな足跡を残した。これ以前にもジョン万次郎（中浜万次郎）、ジョセフ彦（彦蔵）らがアメリカの土を踏んでいるが、彼らは漂流中に米船に助けられて連れて行かれた渡航者で、彼の地に渡る意志を持っていたわけではない。万次郎はのちに通訳になり、日米通商条約締結後の1860年（万延1年）に咸臨丸に乗って再渡米している。南米には1871年（明治3年）に山本権兵衛が立ち寄ったという記録がある。

これらは個人的な先駆者であるが、1868年（明治元年）には移民も登場する。国外に働き場所を求めてハワイに移住した153人とグアム組の40人余である。彼らは「元年者」と呼ばれ、日本人の最初の移民として記録されている。翌69年には戊辰戦争に敗れた会津の人達がサンフランシスコに渡った。その後、サトウキビ農場で働く移民について日本政府とハワイ（当時は王国）が協定を締結し、1885年（明治18年）に官約移民第1陣の900余人がハワイに移住した。官約移民は10年間実施され、計26回の移民船が29,000人をハワイに運んだ。この協定による移民のあとは移民会社が移民の募集、渡航を引き継いだ。しかし、1896年（明治29年）に日本人上陸拒否事件が起き、続いて移民制限措置がとられて自由な渡航が難しくなった。移民の権利も制約を受けた。このような事情から、ハワイ移住者たちはアメリカ本土へ移住先を変えて続々とサンフランシスコ、シアトルなどに向かった。日本人移民はこんな経緯を経てアメリカ大陸に移り住むことになった。明治中期のことである。

この時期にメキシコ、南米ペルーへの移民も始まった。ブラジル移民はもう少し遅れて1908年(明治41年)が最初で、鹿児島県人をはじめとする791人が移民船「笠戸丸」に乗って神戸を出航し、インド洋から大西洋を回る52日の航海の末サントスに着いた。

アジア地域への移民も1904年(明治37年)のフィリピンに始まって、ニューカレドニア、マレーシア、インドネシア(スマトラ)など南方各地に広がっていった。昭和初期からは国策として満州(中国東北部)移民が進められ、満蒙開拓青少年義勇団などの形をとった若者の移住が半強制的に実施された。

大戦後も海外移住政策が続けられた。ブラジル移民は1953年(昭和28年)に再開され、パラグアイ、ボビリア、ドミニカなど主に中南米地域へ移民が送られた。ドミニカの移住地は政府が紹介した土地の条件が劣悪で、夢破れた移住者たちが日本政府を相手に損害賠償訴訟を起こし、係争中である。

鹿児島県の移民は、スタートは他県より多少遅いが、明治中期以降、多数の移民を海外に送り出している。『鹿児島県史』には次のような記述がある。

「明治19年の海外渡航人員は19名にすぎなかったが、明治中期以来ハワイへの出稼ぎ移民が盛んになり、明治39年には実に725名の多数に上った。明治40年にはカナダ渡航者406名に達し、41年メキシコに146名、初めてブラジルに184名、ペルーに225名を送った。引き続き南北米への出稼ぎ者が多く、かくて明治35年以後10年間の渡航者総数は4,609名に達し、その過半は出稼ぎ移民であり、本県は当時広島、和歌山等の諸県とともに全国有数の移民県として知られた。……昭和10年現在の外国在留人員は14,800名、その1年間の送金額76万5,000円……」

II. 鹿児島県のブラジル移民

第1回移民船「笠戸丸」 サントスはサンパウロの南西に位置する古い港である。ブラジルへの第1回移民船「笠戸丸」は、1908年(明治41年)6月18日朝、サントス港に着いた。鹿児島県の移民184人が出航を前に神戸港で撮った写真がある。男性はほとんどが出発に備えてあつらえた三つ揃いのスーツ姿

である。上陸時にもたぶんこの「晴れ着」をまとっていたであろうことは想像に難くない。ちなみに日系人たちは6月18日を「移民の日」として毎年記念の行事を催し、10年ごとに盛大な記念式を挙げる。1998年は日本人移民90周年であった。

1978年の70周年時に、私は記念式を見る機会を得た。現天皇が皇太子のときで美智子妃とともに式典に列席して、日系人たちの大歓迎を受けた。式場になったサッカー競技場に、まだ存命だった3人の笠戸丸移民組が招待されて姿を見せた。80歳をいくつか過ぎた老齢だった。新聞記者だった私は来し方を聞き、それを記事にした。多くを語りたがらなかったが、ふるさと鹿児島への強い思いを感じさせた。

そのひとり田中ツタは、再度会いに行った老人ホームでトツトツと語った。

生まれ故郷の加世田で移民の募集に応じたのは18歳のときだった。月に120円ほど稼げるというので「軽い気持ちで、3年くらいで帰るつもりで」移民に加わった。募集の条件が家族単位だったので、適当な人と仮の夫婦になってもらった。コーヒー農園で働く約束だったが、仕事に就いてみると出発前に聞かされた条件と実際とは大違いで、「朝暗いうちに畑に出て日が暮れてやっと仕事が終わる」労働を強いられた。「一生懸命働きましたの。それでも食べがなかったのね。1週間水ばかり飲んで過ごしましたの」。〈食べがなかった〉は食べられなかったの意で、鹿児島方言の言い方である。加世田に住む、もう老境にあった姪とその家族の写真を準備していたので贈呈したら、肩をふるわせた。食うに事欠く生活で、3年くらいで帰るはずだったのが1度も帰郷できなかった。老人ホームで余生を送るそのときが「人生で一番幸せ」と言った。

田中ツタのブラジルでの人生はまだましな方だったようである。記録によると、コーヒー農園に就労した移民たちは低賃金で長時間労働を強要され、住居も食事も劣悪で、移民募集時の約束と違ふと不満をつのらせて逃亡者が続出した。入植した翌年には待遇改善を要求して就労拒否の実力行使も実施されたようである。首謀者のひとは坊津出身者だったという。この「事件」で第3回

の移民募集では鹿児島県人をはずす対抗措置がとられた。

農園経営者は日本からの移民を奴隷並みの労働者とみなしていた。ブラジル移民を描いた石川達三の『蒼氓』や北杜夫の『輝ける蒼き空の下で』、大戦前の在ブラジル鹿児島県人会長・池田重二の労作『鹿児島県人ブラジル移植民史』などが、奴隷的待遇をうけた日本人移民たちの労苦を記述している。移民70周年記念式典に合わせてサンパウロに日本移民資料館が開設され、初期の移民たちが寝起きした住居が往時そのままに復元してあった。屋根と壁はカヤで造った粗末な家に、かつて農村で普通に見られたように天皇・皇后の写真が飾っており、その前で移住者たちがしきりにうなずいていたのを鮮明に思い出す。

移民労働者の待遇は他の国でも過酷なものだった。ペルー移民の中には厳しい労働と風土を逃れるためにアンデス山脈を歩いて越えてブラジルに移動した人々が少なからずいた、と語り継がれている。王国時代のハワイやグアムでも重労働、賃金不払い、劣悪な食事で病死者が続出した事実があり、アメリカ、カナダでは数回にわたって移民制限措置、移民禁止措置がとられ、また日本人排斥運動が発生した。そのために暴動と呼ばれる抵抗事件がいくつも発生した。サンフランシスコの事件やバンクーバーの事件などが代表的な事例である。

明治期の北米移民は、まずハワイに渡り、ここからアメリカに移住するケースが多く、アメリカの移民禁止令で閉め出された人達がさらにカナダへ移住するというパターンをたどった。禁止令の背景には日本や朝鮮からの移住者が急増したこともあるが、白人による日本人迫害がひどくなって合衆国政府がその解消策として日本人の移住制限に踏み切ったという事情もあったようだ。なお中国人の移民は日本より数十年早く、1882年（明治15年）には早くも中国人移民排斥法がつくられている。

このような苦難を続けながら、日本からの移民は続き、ブラジル移民を運ぶ移民船は1940年（昭和15年）までに合計310隻が海を渡った。ブラジルに住む鹿児島県関係者は、子孫を含めて3万人に達する。

移民の母 辛酸をなめつつ異境の地で年を重ね身寄りのなくなった移民に、安住の家を提供する人もいた。その1人、ドナ・マルガリーダ渡辺は、「聖母」

「移民の母」と移民たちに称えられた人だ。ドナは、ポルトガル語でマダムの意だが、尊敬、愛情、親しみを込めた呼称という。1996年3月、95歳で死去。

枕崎のカツオ船主の娘として生まれた。母が10歳のときに死亡し、翌年父の事業が失敗、その年1912年に11歳で単身ブラジルに渡った。父の借金を返済するための出稼ぎのつもりだったという。サンパウロの親切なブラジル人の家庭で使用人として働き、勧められてカトリックの洗礼を受けた。これが日本人移民の救済活動を始める原点になった。結婚して子育てが終わった頃に1人で救済活動を始めた。その活動は実に53年におよぶ。やがてサンパウロ郊外に「憩いの家」を私費で造り、身寄りがなくふるさとの日本に帰るあてもない孤老たちの終の棲家にする。田中ツタが「今がいちばん幸せ」といったのは、このホームで落ち着いた余生を送っている実感からだった。

その功によって、日本政府から藍綬褒章，勲五等瑞宝章，勲四等宝冠章を受けるが、憩いの家で会ったとき、「ホーム運営の資金援助はなにもないのよ」と言って笑った。ほかに、サンパウロ市議会からアンシエッタ賞を受け、吉川英治文化賞，枕崎市名誉市民，朝日新聞社社会福祉賞，鹿児島県の県民特別表彰など数々の表彰を受けた。

移民の先駆者 笠戸丸による第1回ブラジル移民よりも数年早く海を渡った先駆者がいた。鹿児島市で判事をしていた隈部三郎とその共鳴者たちである。隈部は熊本県の出身で、妻と16歳から5歳までの4女1男の子供がいた。明治も中頃になると移民の情報が鹿児島にも届くようになる。隈部は駐ブラジルの杉本公使のブラジル報告を読んで、彼の地で開拓地経営の夢をかき立てられた。そして隈部一家とこれに影響された鹿児島の青年教師ら数人は1906年（明治39年）勇躍渡航船に乗り込んだ。

しかし、思うような土地が手に入らず、条件の悪いジャングルの開拓に挑んで悪戦苦闘を続けた末に計画は挫折を余儀なくされた。1926年（大正15年）失意の隈部はサントス沖で船から身を投げて命を絶った。3女の夫に遺書を残して家族を託した。その3女野上暁子と会って話を聞くことができた。窮乏生活のなか、子供5人にはきっちりと中等教育，高等教育を授けたということだ

った。

Ⅲ. 「有数の移民県」の背景

揖宿郡颯娃町の摺木地区は「あめりか」と呼ばれる。摺木は同町のアメリカ移民発祥と地といわれる。『颯娃町郷土史』によると、北米移住者の成功者はアメリカどんとって尊敬された。全戸数 70 のうち 50 戸はだれかが渡米中で、残っている人々も 1 度はアメリカの土を踏んだ、というほど移民経験者が多いのだそうだ。なお移民の記録は他の市町村の郷土史にも出てくる。

これらが物語るように、鹿児島は日本有数の移民移出県であった。それはなぜか。

ひとつには農村の人口過剰が挙げられよう。これは鹿児島に限ったことではなく全国に共通する姿であった。ハワイへの第 1 回官約移民に 28,000 人もの申し込みがあった事実はこれを物語る。要は、農村全体が貧しかったのである。

『鹿児島農業の構造』に、知覧町についての記述がある。それには、明治時代から出稼ぎが多くアメリカへ出稼ぎに行く人が急増した事実を述べられている。同書によると、人口と耕地のアンバランス、生産力と収奪度のアンバランスが藩政時代からの問題で、要するに個々の耕作面積が小さく生産力が上納量に追いつかないために、農民は等しく苦しい生活を強いられていた。

明治の新時代になっても貧しさが消えたわけではなく、同書に掲載された井戸掘り技師の農家見聞記には、「一般にどの農家も貧しい。魚は月に 2～3 回、肉は年に 2～3 回」と書かれている。明治になって変化したのは移動が自由になったことで、そのせいで出稼ぎが急増して官公吏、軍人、巡査等になって村を出ていき、アメリカ出稼ぎも急増したようだ。同書は「薩摩は日本屈指の出稼ぎ地帯であり、男は炭坑、女は

知覧町の出稼ぎ者

	村外出稼ぎ	海外渡航
明 20	863 人	63 人
25	840 人	137 人
30	838 人	139 人
35	783 人	162 人
40	779 人	163 人
大 1	531 人	170 人
5	829 人	205 人
10	878 人	340 人
14	894 人	316 人

紡績工場に出ていった」旨を書き記している。

同様の記述を『沖縄県史』に見ることができる。ちなみに同県史は第5巻全部を「移民編」にあてている。

沖縄県はもともと移民の多い県である。その理由について同書は、急増する人口と過剰人口の解決、疲弊した県経済の救済、国の重要施策、海外雄飛の思想、移民会社の甘言に乗せられて、などを挙げながら、最大の理由は農村の貧しさであると明記している。国の重要施策とは、1923年の関東大震災の罹災者に渡航費補助金を出して移民を勧めたことを指す。県経済の疲弊は1898年（明治31年）の飢饉によって金融ひっ迫が生じた事態をいっている。飢饉は当然に農民に及び、多くが基幹作物のサトウキビ栽培の壊滅的被害で借金苦に陥った。食うために農民は出稼ぎに頼らざるを得ない状況に追い込まれた。1904年（明治37年）の移民852人のうち733人は沖縄本島北部の農民であったという。

彼らは重労働で稼いだ金をせつせと故郷に送った。1923年（大正12年）の移民の送金額は86万円で、これは県の歳入195万円の44%に当たる、と『沖縄県史』は書いている。

『鹿児島県史』にはこのような記述はない。しかし、移民の実態は初期移民の証言や『鹿児島県人ブラジル移植民史』の記述などから大同小異と考えてよく、移民からは国元へ相当額の送金が続いたことは間違いない。移民の実態は、一族の生活を支える出稼ぎそのものだったのだ。

IV. 人材移出県であり続ける鹿児島県

海外への移民は大戦後も続いた。政府の説明と現地の入植条件が違いすぎて訴訟沙汰になっている中米ドミニカへも、鹿児島県人多数が応募した。戦後の1940～50年代、農村はいぜん貧しく、農家の二、三男の身の振り方が行政の重要施策のひとつになったように、農村は過剰人口を抱えていた。そのはけ口のひとつが移民であった。

1950年代後半になって、日本は経済の高度成長期を迎える。50年からの朝

鮮戦争がもたらした特需景気をバネにして経済は活気を帯び急成長を始めた。60年、当時の首相池田勇人は所得倍増論を唱えるとともに、好況に乗って急拡大する重化学工業を中心とする製造業に農村の若年労働力を動員する「人移し政策」を展開した。都市部の企業は労働者を増員して事業を拡大し、農村の若者たちはそこに吸収されてどんどん都会に出ていった。この農村から都市への人の流れは「民族の大移動」といわれたほどの規模で、かつ短期間に生じた前代未聞の現象だった。新制中学校を卒業したばかりの15歳の少年少女が「金の卵」ともてはやされて大都会に迎えられたのもこの頃のことである。鹿児島県は職業安定所と協力して彼らのために貸し切りの臨時列車を走らせた。集団就職列車と呼ばれたこの輸送方式が登場したのは1956年（昭和31年）春で、鹿児島が先鞭をつけた。

高度成長下で進んだ「人移し」は、政府の想定外の規模で実現し、農村から若者が根こそぎ都会にもっていかれる状況が現出した。二男、三男ばかりか後継ぎになるべき長男までが農村を離れ、さらには農業に従事している中年層、高年層が出ていった。その結果が過疎化である。

過疎とは、地域社会の機能を維持できない状態にまで人口が減少する事態をいう。農村の伝統である地域の共同作業が実施できなくなる。青年団や消防団を維持できなくなる。人口減で患者が減って診療所が撤退し無医地区になる。児童生徒の減少で複式学級が増え中学校が統合される。つまり、農村に活気が失われ、コミュニティが崩壊して住みにくい地域になってしまう。なにより主幹産業の農業が衰退の方向をたどる。政府は日本列島の不均衡発展をなくそうと過疎対策を打ち出したが効果は乏しい。

計算すると、鹿児島県はこのなだれのような人口移動でのべ200万人に上る県民を県外に送り出したことになる。200万人というとピーク時の県民総数とほぼ同じ数である。「金の卵」の中学校卒は高校進学率の向上で数が激減し、代わって高校卒が大量に県外に就職した。これについて、当時の鹿児島県知事金丸三郎は、鹿児島から人材を提供される都府県は交付金を払ってしかるべきだと言ったものだ。

過疎対策のために政府は1970年に過疎対策緊急措置法を制定した。10年の時限立法で、以後10年ごとに新たな過疎法をつくり、2000年には4つ目の過疎地域自立促進特別措置法をスタートさせた。それぞれの過疎法が定める適用条件に鹿児島県のほぼ4分の3の市町村が該当し、過疎債の発行や地方交付税の算定等で特別の優遇措置を受けている。新々々過疎法である過疎地域自立促進特措法では、県内96市町村の71%の68市町村が適用対象になった。全国第3位の高率である。うち阿久根、大口、垂水、西之表の4市も引き続き過疎法の対象である。

過疎地では人口の高齢化が他に先んじて進行する。鹿児島県の高齢化率は2000年3月時点で22.4%、もっとも高いのは上甕村で46.2%、ほぼ2人に1人が65歳以上という人口構成である。高齢化率が40%を超えている町村は4つ、30%台は33市町村、20%台が50市町村、10%台は9市町で、もっとも低いのが鹿児島市と国分市の15.9%である。過疎地のほとんどで、生まれてくる赤ん坊の数より死亡者数の方が多い自然減が当たり前になっており、外に出ていく人がいなくても人口が減る状況にある。その結果、国土庁の調査によると、21世紀初頭には県内の88の集落が消滅する可能性が高いという。

これが100年以上にわたって人材を移出し続けてきた鹿児島県の現状である。

海外に夢を馳せたかつての移民たちは、身を粉にして働いて得た報酬で一族の生活を支え、暮らしの向上を願った。地域の発展も願ったであろう。生まれ育った故郷が人口減少で消滅してしまうなどということは、想像さえしなかったに違いない。

おわりに

人の数が適量以上に減ってしまった—それが鹿児島県の大部分の地域の現状である。その原因は高度経済成長期に県民の多くが職を求めて都会に出て行ったことにあった。その傾向はなお続いている。なぜ県外に出ていくのかを突き詰めれば、「食えないから」という現実に行き着く。その昔、多くの先人たちが県外に出稼ぎに出て行き、海外に出稼ぎの場を求めたのも「食えないから」

であった。明治や大正の時代と現在とでは「食えない」ことの意味合いには幾分かの違いがあろうが、外に出た方が稼ぎがよいと考える点では共通するだろう。つまり、明治の世も今も、基本的な構図はあまり変わっていないことになる。

では、これを変える方法があるのか。行政も住人たちもそれについて模索を続けてきた。行政の施策の成果のほどは大方が知っているとおりでである。そして山間部あたりの集落の灯が消えようというところまで事態が進んだ。なんとか打開策を見出して、人材移出県の後始末をつけなければならないときである。

工場誘致や大型レジャー施設の誘致といった他力に依存した地域おこしは、ごく少数の事例を除いて実効を挙げ得なかった。つまり外来型発展の手法は有効ではなかった。これが経済の動向に大きく左右されるという欠点もはっきりした。これに代わる「内発型発展」論がいま注目を浴びている。地域に内在する資源を掘り起こして活用することで発展を図ろうという主張である。資源には「人」も含まれる。これには経済効率を最優先するこれまでの開発主義に対する反省もある。

農村の再評価論も目にするようになった。洪水を防ぎ生態系を維持する機能の再認識や、都市と農村の交流を重視するグリーンツーリズムの勧めなどが力を得てきている。ひと頃に比べれば農村の注目度は上がってきたとあっていい。この動きを無為に見過ごす手はないだろう。要は、農村において「食える」状況をつくりだすこと、である。

《参考文献》

- 『鹿児島県人ブラジル移植民史』（池田重二）
- 『在伯鹿児島県人発展史』（白石愛義編）
- 『輝ける蒼き空の下で』（北杜夫著）
- 『鹿児島県史』（鹿児島県編）
- 『沖縄県民史』（沖縄県編）
- 『日米文化交渉史』第5巻（開国百年記念事業会編）
- 『日本経済史』第4巻、第5巻（岩波書店）
- 『鹿児島農業の構造』（鹿児島県編）
- 『日系人 その移民の歴史』（高橋幸治著・三一書房）
- 『舟にみる日本人移民史』（山田廸生著・中央公論社）